

1 昔話とは

この企画のタイトルになっています「昔話」や、動画のコメントでよく使っています「話型」等の用語の意味について、専門書を参考に、簡単ですが説明させていただきます。

なお、この企画で取り上げた100話には、昔話の他、伝説も含まれており、その意味では、「佐賀の昔話」という言葉は正確な使い方ではありません。ただし、語り手の感覚から言えば、伝説も昔話も同じであることが多いことから、この使い方もあながち間違いとは言えません。

(1) 昔話と伝説の違い

「日本昔話ハンドブック」(稲田浩二他編、平成13年、三省堂)によると、

- **昔話**→「民間の人々が生活の中で伝えてきたもので、語り手が聞き手に語るという口頭伝承(口承)を基本的な伝承の様式として持つ、一定の型を備えた散文の形式…(中略)…、発端句や結末句(結句)を用いるなどして話の様式性や虚構性を重視する点を特徴とし、伝説や世間話と区別される」
- **伝説**→「民間において口承で伝えられてきた散文形式の物語という点で昔話と共通するが、しばしば具体的な事績や人物と結びついて、歴史的な事実性や共同体における共有制を重視する点を特徴とする」

とされています。

なお、参考までに、都市伝説がそのジャンルに入るとされる「世間話」については、次のように定義されています。

- **世間話**→「民間において口承で伝えられてきた散文形式の物語という点で昔話と共通するが、様式性や虚構性を重視しない点で異なる。また、語り手の身近で起こった出来事として自在に語られる点で伝説と区別される。」

ただし、実際には、明確にこの3区分に分類できる話は少なく、例えば、話に様式性や虚構性があり、豊かな話であっても、具体的な事績や人物と結びついたものであれば、伝説とすることも少なくありません。

例えば、本シリーズの100話中の「杵島山の松の精と三弦弾きの娘」(No.27)は、話そのものは「木魂婿入り」という話型も存在し、典型的な昔話に該当しますが、話の舞台が白石町の杵島山であること、松の木を使用したという馬田橋が実際にあること(今はコンクリート橋に代わっているが)等から、伝説に分類せざるを得ません。

こうした話が、100話中の伝説16話の中に10話見られます(後述の「2 県内における昔話の採集状況」の(2)参照)。

(2) 昔話の話型(タイプ)とは

同じく、「日本昔話ハンドブック」によると、

- **話型**→「昔話を整理する際、基準として用いられる昔話分類の単位。話を構成する1ないし複数の主要なモチーフが一致し、その配列順序も同じ話を同一の話型として認定する」

とされています。

そして、その数は、「日本昔話名彙」(柳田国男監修、昭和23年、日本放送出版協会)では約340話型(話数も340話)、「日本昔話集成 全6巻」(関啓吾著、昭和25~33年、角川書店)では約650話型(同、8,700話)、そして、直近の「日本昔話通観 第28巻(昔話タイプ・インデックス)」(稲田浩二編、昭和63年、同朋舎)では約1,211話型(同、約6万話)とされています。

全国では、その後も調査が続けられており、現時点では、話型の数はもっと多くなっていると思われるが、整理されたものはまだありません。

ちなみに、佐賀県内での話型数も、現時点ではまだ整理されたものはありませんが、県内で一番話を語った語り手の蒲原タツエさんが843種類の話語っていることから、1,000種類は確実に超すと思われます。

なお、動画のコメントの中で「話型群」という用語もたびたび使用していますが、「話型群」とは、同じような話型の集まりを指し、同じく「日本昔話ハンドブック」によると、

- **話型群**→「複数の異なった話型が、主要登場者で共通しており、しかも話の構成や主題が類似している場合、これを話型群あるいは話群と呼ぶ」

とされています。

例えば、本シリーズの「貝の恩返し(貝姫)」(No. 18)は異類婚姻譚(異類聲)という話型群に属しますし、「蕎麦の根の赤い由来(神様の金の鎖)」(No. 55)は「逃鼠譚」という話型群に属します。